

# 組織目標評価報告書（平成27年度）

部局名：

文学部

部局長名：

金関 猛

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<b>①教育領域</b>	
<b>①-1 目標</b>	
<p>①組織的なFD 学部教育にとって有効なアクティブ・ラーニングのあり方を検討し、研修会を開いて教員の教育方法の改善に関する意識の向上に努める。</p> <p>②教員のインセンティブ 優秀教員賞について検討する。</p> <p>③教育成果の検証のためのアンケートの実施・分析 文学部の教育方針に照らし、教育成果の検証につなげるために、様々な学生対象アンケートの実施・分析を行う</p> <p>④教育改革 次年度からの60分・クォーター制の導入を踏まえ、新たな人文学教育を可能にする教育カリキュラムを策定する。</p> <p>⑤教育の国際化 この数年で倍増している日本人学生の派遣・留学生の受け入れを継続するとともに、さらに増加させる方策を検討する。</p> <p>⑥学生支援 「文法経学生・院生相談ルーム」の利用を学生に呼びかけ、学生のメンタルヘルスの向上を支援する。指導教員による学修に関するきめ細かい指導をさらに充実させる。新聞社の運営するデータベースを試験的に導入し、就職活動支援を行う。</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>組織的なFD活動に関しては、人文学の基礎Aおよび人文学インタラクティブ講義の開講に関して、活発な議論を行い、文学部におけるアクティブ・ラーニングのあり方を検討した。また、年度末にはFD研修会を開いて教育方法の改善に関する意見交換会を行った。</p> <p>教員のインセンティブに関しては、新たな制度を設けるには至らなかったが、学生に対する研究指導の成果として、優秀な卒論を表彰する制度を検討し、来年度からの導入を決定した。</p> <p>教育成果の検証のためのアンケートの実施・分析については、入学時・卒業時・初年次教育に関するアンケートを行い、また、授業評価アンケートの詳細な分析を行った。授業評価においては、問題のある授業は皆無であった。</p> <p>教育改革については、次年度からの60分授業・クォーター制の導入を踏まえた取り組みを行い、人文学の学際性、学生の主体性、実践性を重視する、新たな教育システムを策定した。</p> <p>教育の国際化については、すでに高い水準にある日本人学生の派遣数・留学生の受け入れ数を維持することができた。</p> <p>学生支援については、「文法経学生・院生相談ルーム」の利用を学生に呼びかけた。利用者はあまり増えていないが、相談をきっかけとして学業への復帰をはたした例もあり、相談する学生にとってはなくてはならない場所になっている。本年度より契約した日経テレコンの利用ログより、このデータベースが就職活動等に十分に活用されていることが確認された。</p>
<b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	
<p>学生による授業評価 留学生(受入、派遣)人数 卒業生アンケート</p>	
<b>②研究領域</b>	
<b>②-1 目標</b>	
<p>①文学部プロジェクト研究の継続 異なる学問分野を専門とする教員による領域横断型の共同研究プロジェクトを継続し、学際的研究をさらに発展させる。</p> <p>②文学部主催講演会シリーズの継続 文学部教員の研究ネットワークを活用した、外国人(在外日本人)研究者による「ニホンガク最前線」シリーズを継続するとともに、若手教員による新企画をスタートし、学生向けの対話・交流型ワークショップ等を通じて研究と教育の一体化を図り、研究のさらなる活性化を促す。</p> <p>③科研の申請率、獲得率の向上の努力 科研申請率および獲得率の向上を目指して、教員研修会を開く。</p> <p>④共同研究の企画、実施、広報の系統化 研究担当学部長補佐を任命し、共同研究の企画立案、講演会、シンポジウム等の開催、それに関する事前、事後の広報を系統化する。</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>文学部プロジェクト研究として「ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究」、「貧困とマイノリティ/マジョリティ」を新たに設置し、学際的研究を展開するとともに、公開セミナーを開催した。</p> <p>「ニホンガク最前線」を継続し、2回の講演会を開催した。とりわけ「吉備みらい研究センター設置プレ企画」として開催した「ニホンガク最前線」の講演会は、「吉備みらい研究所」の設置という将来構想に結びつくという成果を得た。</p> <p>27年度に科研の交付を受けている文学部教員は23人、応募数は23であった。人文系では一般に交付を受けている研究者がさらに重ねて科研に応募することは困難であり、このことからすると、科研の申請率は非常に高いと判断される。研究担当学部長補佐を任命し、共同研究の企画立案、講演会、シンポジウムの開催に関する広報を系統的に行った。</p>
<b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	
<p>共同研究の実施状況 科研費申請率</p>	
<b>③社会貢献(診療を含む)領域</b>	
<b>③-1 目標</b>	
<p>①各種公開講座の継続・充実 引き続き学外者を対象とした講演会や催しを積極的に展開する。</p> <p>②研究成果を市民に公開する講演会、シンポジウムの開催 教員の研究成果を講演会、シンポジウムの開催というかたちで社会に還元する。とりわけ、海外の研究者との共同研究に基づく講演会を開くことにより、岡山大学発の人文学の国際化に寄与するよう努める。</p> <p>③海外大学との交流推進 文学部の教育・研究の活性化、拠点化・国際化のため、さらに海外の大学との交流を拡大する。教員の公募においては、必要に応じて国際公募をする。</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>各種公開講座の継続・充実については、文学部公開講座を含め計20回の講演会、セミナー、シンポジウムを開くことができた。いずれも学外、学内の多数の聴講者の出席があった。</p> <p>文学部プロジェクト研究の成果を発表する公開セミナーを、講演会を開き、研究成果を学内外に公開することができた。また、海外の日本学研究者による講演会シリーズ『ニホンガク最前線』を継続した。これは海外の研究者を講師として招聘する講演会シリーズであり、大学の国際化に寄与した。</p> <p>本年度は海外の4大学と部局間交流協定を締結した。ただし、教員採用人事の凍結により、国際公募等は行われなかった。</p>
<b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	
<p>市民向け公開講座、講演会、シンポジウムの開催 交流協定締結、交流実績</p>	
<b>【総括記述欄】</b>	
<p>教育改革による新教育システムの策定、新たな授業科目の創出にあたって若手教員の提案を執行部が吸い上げることができた。また、研究成果の公開という面でも多くの教員が自主的、積極的に講演会活動に取り組んでいた。来年度以降、学部執行部としては、こうした教員の活動をさらに活発化させるとともに、それが学部としてのまとまった活動となるよう努めねばならない。また、来年度には全学で4学期・60分制授業が始まるが、それに加えて文学部では新たな教育システム(8分野制)による教育が開始されるので、学部全体でそれが有効に実施されるよう努力する。</p>	